

ポストニアン・新島襄（JHN）ニューイングランドから見た同志社

本井 康博	同志社大学神学部教授
奨励者紹介【もとい・やすひろ】	〔研究テーマ〕 同志社の創立者である新島襄の思想（キリスト教信仰）と人物について

またまた、ボストン

一週間前にボストンから戻ったところです。来年秋に同志社大学が出す写真集（キャンパス風景が中心です）の編集長を仰せつかっていますので、その撮影のためにカメラマンと編集者を同行して行ってまいりました。

で、海外旅行ですが、この歳（六十三歳です）にしては、いたって少ない方でしょう。たった五回ですから。けれどもわずか五回なのに、そのうちボストンは毎回カヴァーしております。アーモストは四回、アンドーヴァーは三回、そしてチャタムやラットランドが二回ーと、こういうふうに行き先を明かしますと、「よう行くわ」、「なんや、新島っばい所（とこ）、ぱっかりや」と呆れられそうですね。そう、ホントにその通りなんです。

「ほかに面白いとこ、ないんか」と言われても、ボストンへのこだわり、でしょうか。

「なんでそこまで」とお思いでしょうが、それは新島襄という人が、いわば「ポストニアン」だからです。

戦後、一九五九年六月二十四日のことですが、京都市はボストンと姉妹都市協定を結びました。これには、当時の湯浅八郎ＩＣＵ総長（それ以前は、同志社総長でした）がさうとう尽力されたと聞いております。けれども、すでに一九世紀に新島が、両都市の架け橋になっていることを思えば、同志社が取り持つ縁は深いと言わざるをえません。

要するに新島は、半分、アメリカ人みたいな所があります。アメリカ東部、そうです、「ニューイングランド」（新英国）と呼ばれる典型的な東部に、留学生として八年間も暮らしました。だから、厳密には「ニューイングランダー」（ニューイングランド人）と呼ぶべきなんですが、ニューイングランドの中心、ボストンに軸足を置いていましたから、今日は「ポストニアン」で通します。

だいたい、名前からしてそうです。

「上州系江戸っ子」から「ポストニアン」へ

名前からみると、四十七年に及んだ新島の生涯は、三期に分けられます。

まず、「上州系江戸っ子」として二十一歳まで江戸で暮らした幼少年期、これが第一期です。この間、十五歳まで新島は七五三太（しめた）と呼ばれています。この幼名は、十五歳で元服してからは、敬幹という大人の名（諱（いみな））と言います）に変わります。ただ、新島の場合、この切り替えは完全ではありません。成人後も依然として幼名を使うことがあります。時には両方を併用（つまり併記）したりしています。

次に第二期。新島は二十一歳から十年間、海外生活を経験します。この間、新島はアメリカ人からジョー（ Joe）とかジョゼフ（Joseph）と呼ばれました。これを受けて、英語名をジョゼフ・ニイシマ（なぜか、ニイジマではなくて）としました。

そして、いよいよ帰国する段になって、「アメリカの父」であるＡ・ハーディさんから、ミドルネームとしてハーディの名を貰い受けます。つまり、新島はジョゼフ・ハーディ・ニイシマ、略せば「JHN」として、日本に帰国します。

第三期は、帰国から死去するまでの十五年間です。英語名は変わりません。問題はこの間の日本語名です。日本に戻ったからといって、旧名復活、つまり「上州系江戸っ子」の七五三太や敬幹に戻る、これはないでしょう。いまでは宗教的、心情的には半ばアメリカ人、つまり気分は「ポストニアン」なんですから。

で、彼は「ポストニアン」として海外で使っていた英語名を日本語名にしようと、苦心します。最初は、ジョゼフを「約瑟」と漢字表記してみました。「やくしつ」とでも読むのでしょうか。本人は「ジョゼフの略なり」と署名に注記していますから、「ジョゼフ」と読んでほしかったのでしょうかね。でも、これはまず読めませんね、無理です。

ところで、なぜジョゼフが「約瑟」なのか。ジョゼフは聖書ではヨセフです。新島は漢文の聖書から、ヨセフが「約瑟」と表記されていることを知っていたはずです。この名前はいわば中国風ですから、日本人向きの名前とは言えません。

えっ、「襄」は横浜生まれ！？

そこで新島は日本に戻るや、作戦を変えます。今度は、（ジョゼフではなく）ジョーを漢字転換させる、という手法に転じます。ジョーの当て字として選んだのが「讓」です。ところが、これでは「ゆずる」と読まれてしまうので、言（ごんべん）を取るように、という忠告を帰国直後、横浜で松山高吉という信徒（国学者でした）から受けます。

新島はこれをすぐに受け入れます。こうして、「襄」という日本名が確定します。以後、新島は死ぬまでこの名前を使います。この間の消息に関しては、二週間前に出た学内誌（One Purpose

147 二〇〇六年六月一日）に私は、「実は、ここが襄の誕生地」と題した、横浜を紹介する小文を寄せております。「新島襄」が誕生したのは、一八七五年一月七日、横浜の太田町二丁目である、という奇想天外な「新見解」を提示してみました。

「ウッソー、一八四三年、神田一ツ橋やろ」という反論が、すぐ返ってきそうですね。もちろん、正解はその通りなんです。でも、細かいことを言えば、神田で生まれたのは、新島は新島でも七五三太なんです。新島襄という呼び名がこの世に最初に現れたのは、それから三十二年後の横浜でした。

とすれば、この新島襄という名前は、彼の生涯でいえば、むしろ短命です。わずかに晩年の十五年間に用いられたに過ぎないのですから。しかし、彼の公的、というか社会的活動は、ほとんどこの十五年間に集中しておりますから、「新島といえは襄」というのが公式みたいな定説として広く承認されています。

JHN

けれども、注目すべきは、新島の名前の中で最も長命なのはジョーという事実です。二十一歳の折に、上海でアメリカ人船長から貰ったこの英語名が、十一年後に日本語に転換され、死に至る最期まで生きて使われた、というのですから。

第三期に至っても、新島はアメリカ人に向かっては、「ポストニアン」らしく引き続き英語名を名乗ります。だから、名前から見ても、第二期と第三期は、新島の心中では繋がっております。これに対して、第一期と第二期は、はっきりと断絶です。

要するに、新島の生涯を二分する分水嶺があるとすれば、それは一八六四年の上海ということになります。この地で、「上州系江戸っ子」が「ポストニアン」へと転化して行く最大の契機が生じます。

なぜか。新島は上海でワイルド・ローヴァー号をヒッチハイクしました。この出会いは、彼のその後の進路、したがって同志社の骨格を決めてしまうほど決定的に重要です。新島はボストンに着いてから、船長から船主のハーディを紹介され、ハーディ夫妻から厚遇されます。襄子同然の扱いで家族の一員に加えられます。留学中の費用はもちろん、帰国後の生活費も基本的にはハーディ夫妻が負担しましたから、彼らは「アメリカの父母」です。

で、いよいよ日本に帰るに際しては、ハーディから自分の息子を名乗るように、と勧められます。ジョゼフ・ニイシマは、いよいよJHNへと脱皮いたします。こうした新島の進路を考えますと、新島は渡米以後、死去するまで「ハーディ・ワールド」の住民だったことになります。上海はその世界への入り口、すなわち「ポストニアン」JHNへの第一歩でした。

このハーディは、ボストンの高級住宅街（ビーコンヒル）に居を据え、市内中心部に事務所を構える資産家です。しかも、後に紹介するように、彼が関係する教派や、教会、ミッションはいずれもボストンを拠点にしております。要するに、「ハーディ・ワールド」の中軸は、まさにボストン、ということになります。

これで、新島が「ポストニアン」であることがお分かりいただけたでしょうか。

ハーディ

したがって、同志社は「ポストニアン」が創った学校、という側面をもっています。とすれば、創業者の父親であるハーディの存在は、極めて大きいと言わざるをえません。

実際、精神的・宗教的感化という点では「肉体之父」（『新島襄全集』三、四七八頁）たる新島民治（たみじ）の比ではありません。新島自身が「予ノ亡友、予ノ恩人、予ノ米国ノ父」と感謝している通りです（同前二、四〇八頁）。

ハーディは篤実な会衆派系の信徒で、ボストンの目抜き通りに雄姿を誇るオールド・サウス教会の会員でした。現在の会堂の前を走る大通り（ボイルストン通り）は、毎年行われるボストンマラソンのゴールです。今回、Finishと大書した黄色いゴールラインが引いてあるのを確認してきました。

ハーディは、新島を次々と三つの学校へ送り、その生活費と教育費を全面的に負担します。三つの学校は、すべて会衆派系のキリスト教学校で、ハーディはいずれの学校でも理事をしております。とりわけ、ハイスchoolに相当するフィリップス・アカデミーの場合は、自身の母校（ただし中退）であるばかりか、新島が出た後、理事長にもなっていることが、今回の現地調査で明らかになりました。

神学校を終えて、牧師の資格を得た新島は、ミッションから宣教師（厳密に言えば、準宣教師です）に任命されます。このミッションは、アメリカン・ボードというアメリカ最古の宣教師派遣団体で、教派は会衆派主体です。そして新島が帰国する時の運営委員会議長（いわば理事長です）は、なんとハーディなんです。

つまり、新島は宣教師に任命され、日本に派遣される形をとりますが、その際、注目すべきは、宣教師であるばかりか、ミッション理事長の息子として日本に送り返されるという点です。給与はもちろんボストン（の父親）持ちです。

新島は「ポストニアン」として日本伝道のために派遣されるのですから、その半身はアメリカ人のようなものです。したがって、彼が設立する学校も、その教派は会衆派以外には考えられません。こうした進路は、ある意味、既定路線でした。要するに同志社の「遺伝子」、ないしは「血液型」は、上海で早々と決まったも同然です。

ボストンのミッション本部

さて、同志社に關係するアメリカン・ボードというミッションについて、もう少し触れておきます。このアメリカン・ボードの本部（事務室）は、ボストンの中心部にある会衆派会館（Congregational House）という名のビルの一角を拠点としていました。ただし、新島当時の建物は残っておりません。新島の帰国後に現在地に新築移転したのが、今のビルです。

アメリカン・ボードは一九六一年に他教派ミッションと合併して、発展的に解消されましたから、組織上はもう現存しません。ところが、かつて入居していたビルの二階に、図書室（Congregational Library）が残されています。

二週間前のボストン訪問で、私が見学、調査したかった場所の一つがここでした。図書室（閲覧室）の両隣には、二人（二体）の胸像が飾られています。一方のコーナーにはハーディ、他方にはE・A・パークです。

パークと言えば、著名な神学者であり、新島も習ったアンドーヴァー神学校の看板教授です。彼と双壁をなすかのように一対になる形で、ハーディの胸像が据えられているのを目（ま）の当たりにすると、アメリカン・ボードにおいてハーディの占める位置の高さが私たちに直（じか）に伝わってきます。実に印象的な景観ですよ、これは。新島襄の肖像画が掛けられているアーモスト大学ジョンソン・チャペルの、例の「名誉ある場所」をちょっと思い出させますね。

新島はほんとにすごい人に拾われたもんだ、とつくづく思います。これも、上海での運命的な船への乗り合わせがスタートなんですから、なんとも奇遇です。

ちなみに余談ですが、今回の訪問で確認したかったもう一件は、アリー・マクビール（A lly McBeal）のネームプレートでした。四階のドアのひとつに掛かっている、と聞いていたのですが、どこを探してもありませんでした。テレビドラマ「アリーmy Love」の人気もすっかり下火になったからでしょうか。それともネームプレートは、単なる一時の悪乗りだったのでしょうか。

日本では、数年前のNHK海外ドラマシリーズに続いて、現在、京都のKBSが月曜の夜十一時に放映していますから、ご覧になってる方もいるでしょう。あれはハリウッドで制作されたドラマですが、アリーという女性弁護士が勤める法律事務所が、この会衆派会館にあるという設定になっていますので、時々、このビルの正面が映ります。ドラマに使いたくなる一種風格のあるデザインですね、よく見れば。

ミッション資金で開校

それはともかく、ボストン、具体的にはこの旧会衆派会館から日本に派遣された宣教師、JHNが京都に建てた学校、それが同志社です。人材も資金もすべてボストン持ちです。創立の際、「同志社の核」となったあの有名な「ラットランドの五千ドル」（拙著『ひとりは大切』参照）にしても、実は新島が個人で自由に使える金ではありません。ミッションの資金なんです。

というのは、「日本に学校を創りたいからご協力を」と声涙共に下る募金アピールを新島がした現場は、アメリカン・ボードの年会席上でした。年会最終日、それも最後のプログラムである送別会で起きた出来事です。新島が行なったような個人的な「抜け駆け」募金は、厳密に言えば違法、百歩譲っても好ましくない行為ですよ、ミッションから見れば。

たとえ、新島の呼びかけで集まったとしても、献金の最終的な所属は（新島個人ではなくて）あくまでもミッションだったはずですよ。それに、席上献金・予約だけでは、不足したからでしょう、大会終了後、理事長のハーディが自ら息子のために、組織をあげて募金活動を続けてくれています。

こうして大会後日に、五千ドルびつたりにして、ボストン本部は（新島宛ではなくて）日本に居た宣教師たちに送金しました。「ミッション資金」扱いですよ。したがってこの金の使途は、ミッション会議を開いて決定しなければなりません。校地として薩摩藩邸跡地を購入するのも、最初の校舎（第一寮や第二寮など）を建てるのも、すべて日本ミッションの決議や承認が必要でした。

つまり、新島は独自の判断と見解に基づいて帰国し、独力で学校建設を目指した教育者、というふうに伝えられていますが、ホントはそうではありません。とりわけ独力ですべてを計画し、実行できる、すなわち自己の意思で自由に動ける、といったことは考えられません。

「ポストニアン」が創った学校

任地にしても、自分で決める権限はありません。もしも新島個人で赴任地を選ぶ自由があるならば、上州系江戸っ子の新島は京浜、もしくは関東を選んだはずですよ。現実にはそうはならず、関西（実際には大阪）になったのは、アメリカン・ボードという組織の一員として帰国したからです。要するに行きは上州系江戸っ子、帰りは「ポストニアン」です。十年で変身したのです。

「ポストニアン」は、言うならば出向社員ですよ。ここから、同志社の立地はもちろん、性格なりが決まってきます。

立地条件で言えば、新島以前に來日した同僚宣教師は、神戸ならびに大阪に集中していました。したがって、後続の新島には、両地（つまり関西です）以外の選択肢はないも同然ですよ。組織（ミッション本部）の命令というが指示に従う義務がありましたから。到底、個人プレイは許されません。

新島自身が組織の一員、すなわちミッション所属の宣教師であったことを考慮に入れますと、同志社はJ・D・デイヴィスや新島といった宣教師たち一広い意味では「ポストニアンたち」ですよ。ミッションの金を使って京都で開いた学校、すなわち「ミッション・スクール」にほかならない、となります。とりわけ、新島にとっては同志社創立もまた「ハーディ・ワールド」内部での出来事です。ミッション理事長の息子（JHN）が、同僚宣教師と共に立ち上げた学校ですから。

ところが、従来から「同志社はミッションが建てた学校でもなく、ミッション・スクールでもない」といった自負が学内に漲（みなぎ）っております。ちなみに、今ではミッション・スクールという言葉は、本来の意味から拡大して、キリスト教学校の代名詞になっています。私がここで問題にしているのは、もちろん、本来の意味です。念のために申し添えておきます。

つまり、言葉の意味から言えば、同志社は限りなくミッション立（りつ）学校でした。少なくとも初期に限っては、ボストンから見る限り、同志社はアメリカの学校（京都分校）のように映ったはずですよ。京都（同志社）でも、D・W・ラーネッドなどは「校長はふたり」とか、「アメリカに対しては、デイヴィスが校長」と言ったりしてますね。ボストンでも「陰の校長はデイヴィス」という認識がかなりあったようです。

教育半分、伝道半分

さて、以上で新島が宣教師として学校創りに取り組んだ経緯がお分かりいただけた、と思います。繰り返しますが、従来はとかく看過されていた点ですから、ここは重要です。

新島は教育者であると同時に、宗教者なんです。と言うより、教育者である前に宗教者だった、と言うべきでしょうか。この点、世間的には、「いまの同志社大学の創立者」としての側面が圧倒的に有名です。牧師や宣教師としての側面、つまりは「ポストニアン」という一面はとかく見落とされがちですね。

だから私は『新島襄の交遊』という本を出した時、あえて「新島襄は牧師である」という一行から書き起こしました。新島にとって、伝道は必ず取り組まなければいけない業務でした。牧師であり、宣教師ですから。伝道しない宣教師は、ミッションから見れば「月給泥棒」です。

だから、最初の赴任地、大阪では、大阪教会牧師の働きを少しはやっておりますね。要するに、業務の主流、少なくとも業務の半分は伝道でなければなりません。新島の場合、残りの半分が教育、というわけです。

これに関して、新島には有名なモットーがあります。「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」です。教育と伝道が「両者併行」して初めて「国家万歳」なんです。だから、教育の現場でも、神学教育や伝道師養成、さらには聖書の授業や礼拝は不可欠の要素です。開校の経緯に着目すれば、同志社の教育が当初からキリスト教に基盤を置く理由は、火を見るよりも明らか、というわけです。

したがってボストンだけでなく日本ミッションの内部でも、同志社は伝道師養成のための神学校（トレーニング・スクール）であるべきだ、との見解が相当に強かったはずです。ミッションが信徒の献金で学校経営をする以上、これはある意味、当然のことです。常識でもあったはずです。

ただ、新島は同志社を神学校だけで終わらせる気はありませんでした。総合大学が夢でした。ここに至ると、新島は宣教師の世界から「逸脱」しかねない存在でした。ここに新島の苦悩がありました。同僚宣教師（特に阪神地方の）との軋轢がありました。

このように、学校の設立主体がミッション主導であるとなると、出来上がった学校（ミッション・スクール）の基本的な性格がおのずと出てこようか、と思います。

視点を移してボストンから同志社を見ると、また違った風景が見えてきます。あるいは新島を「ポストニアン」として捉えたと、これまで見えなかった側面がはっきりして参ります。

今日は私自身がちょっぴり「ポストニアン」になったつもりで、ボストンに焦点を合わせてお話ししてみました。さて、皆さまも、ニューイングランドから、今出川のキャンパス風景を望遠鏡で覗いた場合、これまでとはちょっと違う趣を持っていることがお分かりいただけたでしょうか。

二〇〇六年六月十四日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録